



小笠原流躰方書 完

1943









一 夏敷のほろろ	一 籠鴨を同くする事	一 格を同くする事
一 音のほろろ	一 夏の敷を同くする事	一 夏の敷を同くする事
一 秋のほろろ	一 音のほろろ	一 秋の敷を同くする事
一 春のほろろ	一 物のほろろ	一 秋の敷を同くする事
一 夏敷のほろろ	一 楊枝を同くする事	一 楊枝を同くする事
一 延敷のほろろ	一 敷を同くする事	一 敷を同くする事
一 心十八ヶ條	一 敷を同くする事	一 敷を同くする事
一 志やつと	一 武士の神のほろろ	一 武士の神のほろろ
一 出せり	一 甚だしくあつた事	一 甚だしくあつた事
一 のり包	一 懶惰のほろろ	一 懶惰のほろろ
一 同	一 出状を同くする事	一 出状を同くする事
一 同	一 瓜のほろろ	一 瓜のほろろ
一 同	一 屏風のほろろ	一 屏風のほろろ
一 同		

一 きぬのし	一 茶のほろろ	一 小神のほろろ
一 おびつと	一 名の子ら	一 梅敷のほろろ
一 さんざん	一 かねを同くする事	一 かねを同くする事
一 やりど	一 傍にほろろ	一 びりを同くする事
一 すもあや	一 食を同くする事	一 食を同くする事
一 糸の花	一 秋のほろろ	一 秋のほろろ
一 糸の花	一 吸物	一 吸物を同くする事
一 糸の花	一 一とんの時	一 一とんの時
一 糸の花	一 七つ	一 七つ
一 糸の花	一 殿のほろろ	一 殿のほろろ
一 糸の花	一 臺のほろろ	一 臺のほろろ
一 糸の花	一 幸徳	一 幸徳
一 糸の花	一 干飯	一 干飯
一 糸の花	一 糍	一 糍





























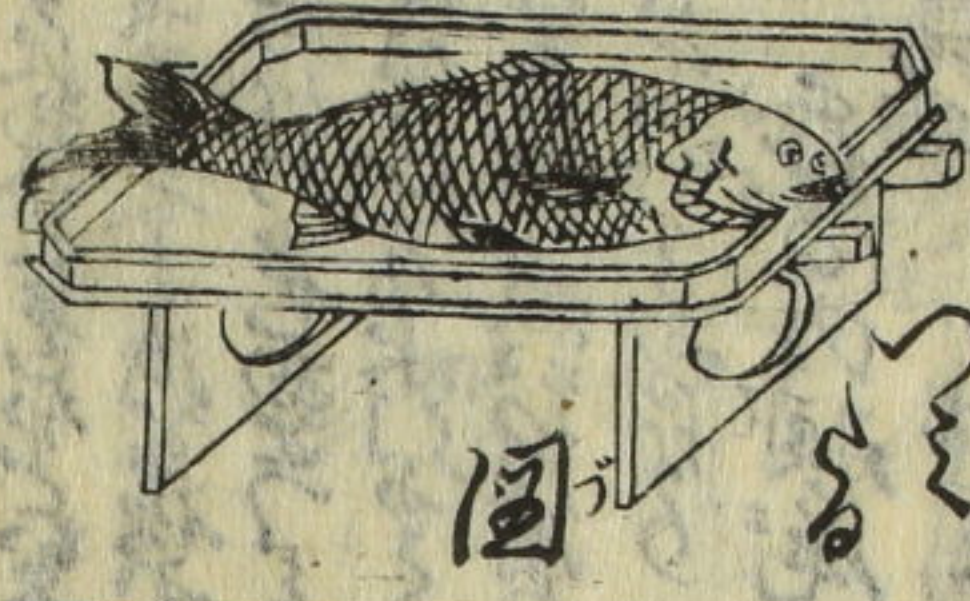








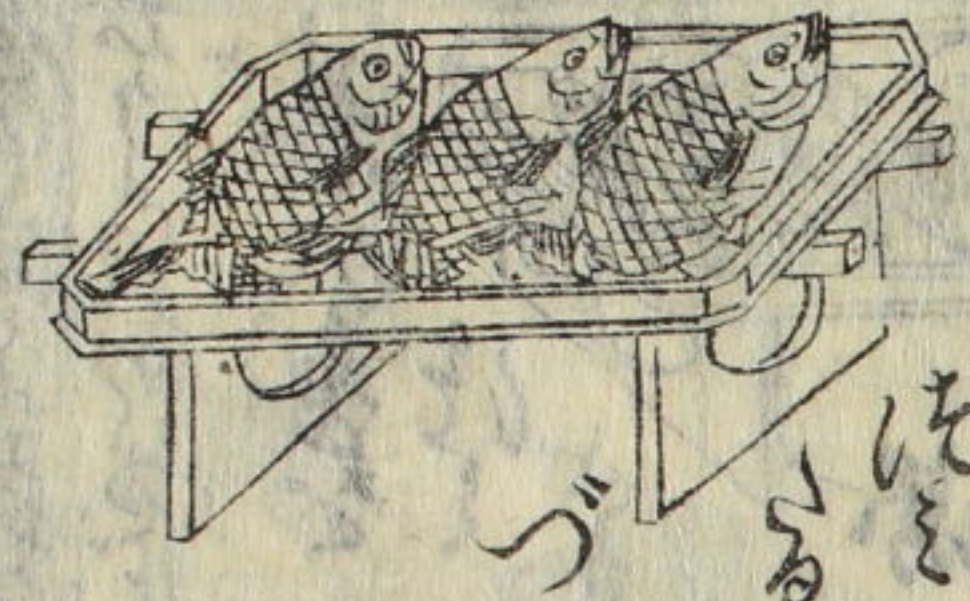




川魚

長細魚の羽尾を  
ろくをよきとる  
一尾の尾のハ  
一尾の羽のハ  
一尾の羽のハ  
一尾の羽のハ

敷いた紙も板のわらごとく紙をいじり  
○紙に紙をよけて出す事  
是の紙のわらごとく紙をいじり  
持てよき。紙をおく。紙をいじり  
の支並紙のわらごとく紙をいじり  
紙をいじり。紙をいじり。紙をいじり  
○物の平と目紙の事  
是のわらごとく紙をいじり  
字をいじり。紙をいじり。紙をいじり  
也。紙をいじり。紙をいじり。紙をいじり



川魚

川魚の羽尾を  
ろくをよきとる  
一尾の尾のハ  
一尾の羽のハ  
一尾の羽のハ  
一尾の羽のハ

○紙をよけて出す事  
是の紙のわらごとく紙をいじり  
持てよき。紙をおく。紙をいじり  
の支並紙のわらごとく紙をいじり  
紙をいじり。紙をいじり。紙をいじり  
○物の平と目紙の事  
是のわらごとく紙をいじり  
字をいじり。紙をいじり。紙をいじり  
也。紙をいじり。紙をいじり。紙をいじり



せむらとあてしる  
 老のひらりひあす  
 産し海とををを  
 ちりしめかのじ  
 春の香を  
 けし  
 ぶ  
 何をもてあから  
 とひらりの相の  
 ねりていりまあぶ



のたあして板のありはまよきあり。板をてを  
 理人のたふ刃と肉のあてを。板を紙つま  
 おおて其上に若とすを。二人してか  
 おて中へさる者。板をかくまひくまひく。板を  
 さる者。あて板を。板を。増へ。さ  
 ら。あり

○板を口目にあてる事

板をまこと。我前にかく。たの。清く。はけ  
 たの手と。しる。さる。て。持。前。は。て。中。は。ま  
 して。ま。ひ。を。ひ。う。あ。か。て。さ。ま。さ。る。な。り。は。後  
 ○洗と口目のあてる事



是右の洗を。若くは。板を。さ。り。て。若  
 くに。あ。て。ま。り。の。前。は。け。其。ま。さ  
 ま。い。ま。あ。い。た。さ。る。あ。て。さ。ま  
 魚し。板を。あ。て。ま。り。の。前。は。け。其。ま。さ  
 ま。い。ま。あ。い。た。さ。る。あ。て。さ。ま  
 ま。い。ま。あ。い。た。さ。る。あ。て。さ。ま  
 ○板を口目にあてる事  
 ひらの。あ。て。ま。り。の。前。は。け。其。ま。さ  
 さ。れ。あ。て。ま。り。の。前。は。け。其。ま。さ  
 や。あり  
 ○ゆがけとあてる事  
 ゆがけとあてる事。巻の中へ入る事



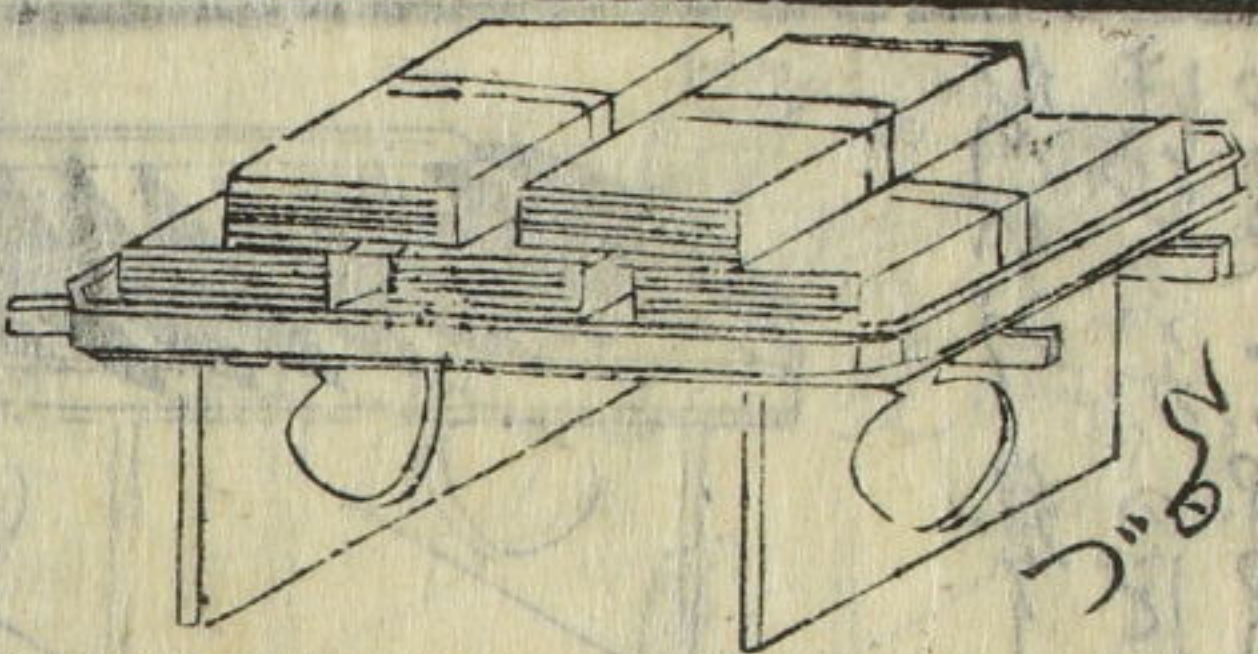








延喜のし



延喜のしのかの  
く杉系十紙の  
紙と二ツおりの  
つる紙はわけて

こ梅りあふせんとせしむるのふ力をとるわが  
らむことほひのふたつはらしてむざし

○麻呂のまき

すゝ法と上巻を渡すすゝみ彩色のすゝあり

まん中と二ツはらうたむしむる

○掛物(かぶら)

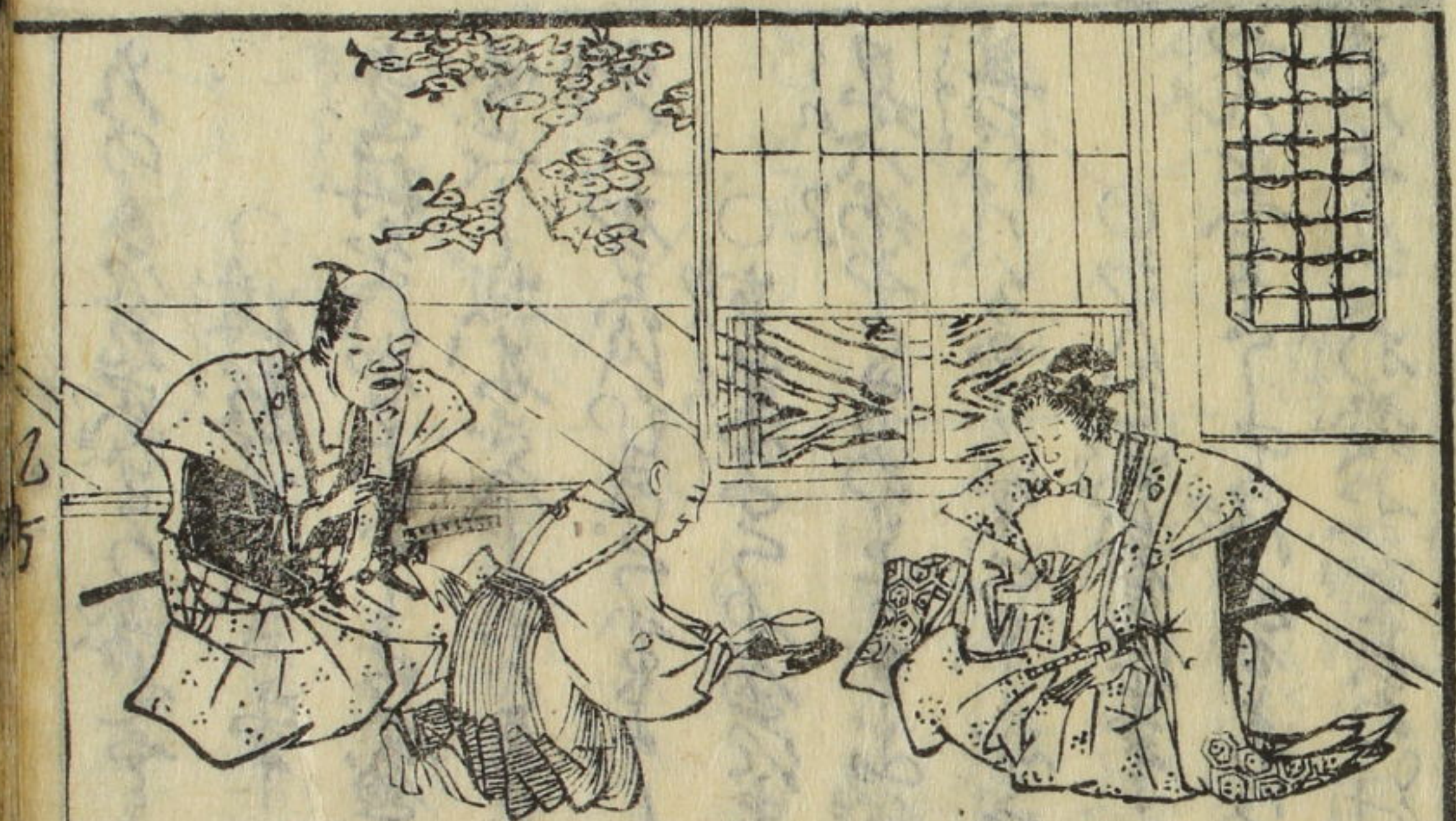
きあふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す

くけあふのふたつはらうけ物とむらうけ。あふ

あふとあふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す

○茶のむら

たのむらと。あふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す



おしあふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す

まき

○小神めき

あふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す

あふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す

あふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す

○あふまき

あふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す

あふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す

あふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す

あふまきとあふ。こすけ射中上巻を渡す



























はらばらに...  
おまはらばらに...  
のまらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...

わらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...

まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...

まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...  
まらばらに...

乙

廿三















一 秋葉の秋のつら  
 ちの事やわら  
 まかり  
 一 風櫃の秋のつら  
 秋のつら  
 一 大目の上金のつら  
 角のつら  
 一 中は金のつら  
 移のつら  
 一 入のつら  
 入のつら

一 秋葉の秋のつら  
 ちの事やわら  
 まかり  
 一 風櫃の秋のつら  
 秋のつら  
 一 大目の上金のつら  
 角のつら  
 一 中は金のつら  
 移のつら  
 一 入のつら  
 入のつら

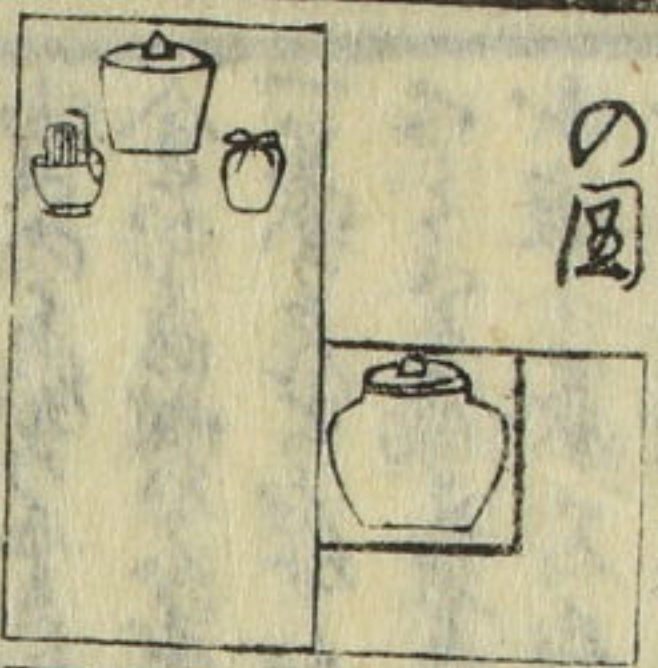
一 秋葉の秋のつら  
 ちの事やわら  
 まかり  
 一 風櫃の秋のつら  
 秋のつら  
 一 大目の上金のつら  
 角のつら  
 一 中は金のつら  
 移のつら  
 一 入のつら  
 入のつら

○其時の供人候の事  
 一 秋葉の秋のつら  
 ちの事やわら  
 まかり  
 一 風櫃の秋のつら  
 秋のつら  
 一 大目の上金のつら  
 角のつら  
 一 中は金のつら  
 移のつら  
 一 入のつら  
 入のつら

○其時の供人候の事  
 一 秋葉の秋のつら  
 ちの事やわら  
 まかり  
 一 風櫃の秋のつら  
 秋のつら  
 一 大目の上金のつら  
 角のつら  
 一 中は金のつら  
 移のつら  
 一 入のつら  
 入のつら



生花の刀や、花器  
 葉の陽の法を、  
 ありとありと、  
 古鉄器、多入、本、  
 書きに、あられ、  
 出さる、ま、  
 同書、  
 の目



水指、  
 同書の、  
 葉入、  
 おと、

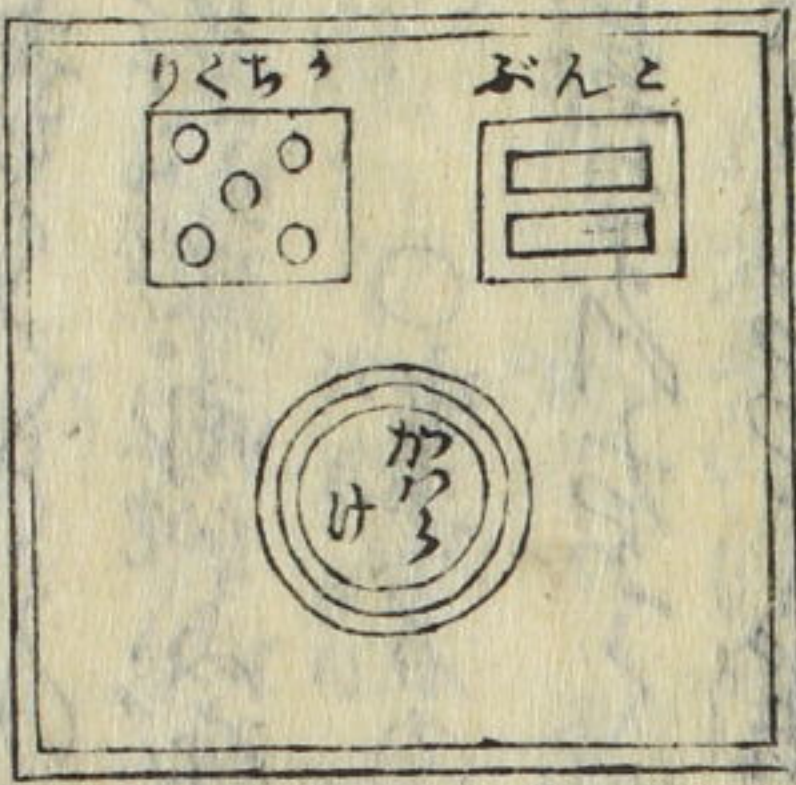
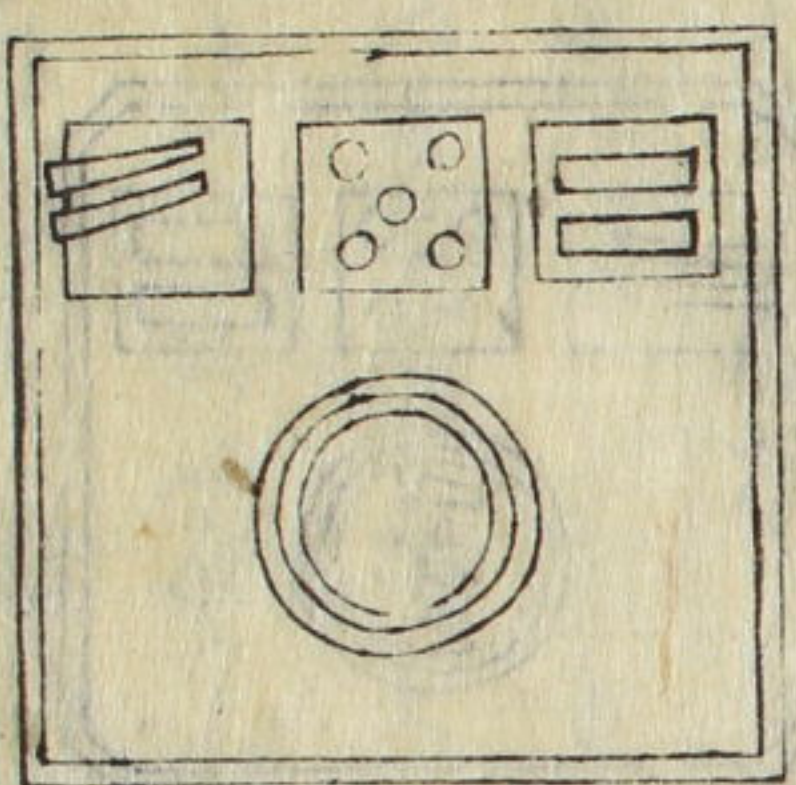
たり、  
 あり、  
 あり、  
 あり、

○嫁取の取乃と相

あり、  
 あり、  
 あり、  
 あり、

○かろくとお持わいの包

あり、  
 あり、  
 あり、  
 あり、



○法の中宛の

あり、  
 あり、  
 あり、  
 あり、

○油障の

あり、  
 あり、  
 あり、  
 あり、









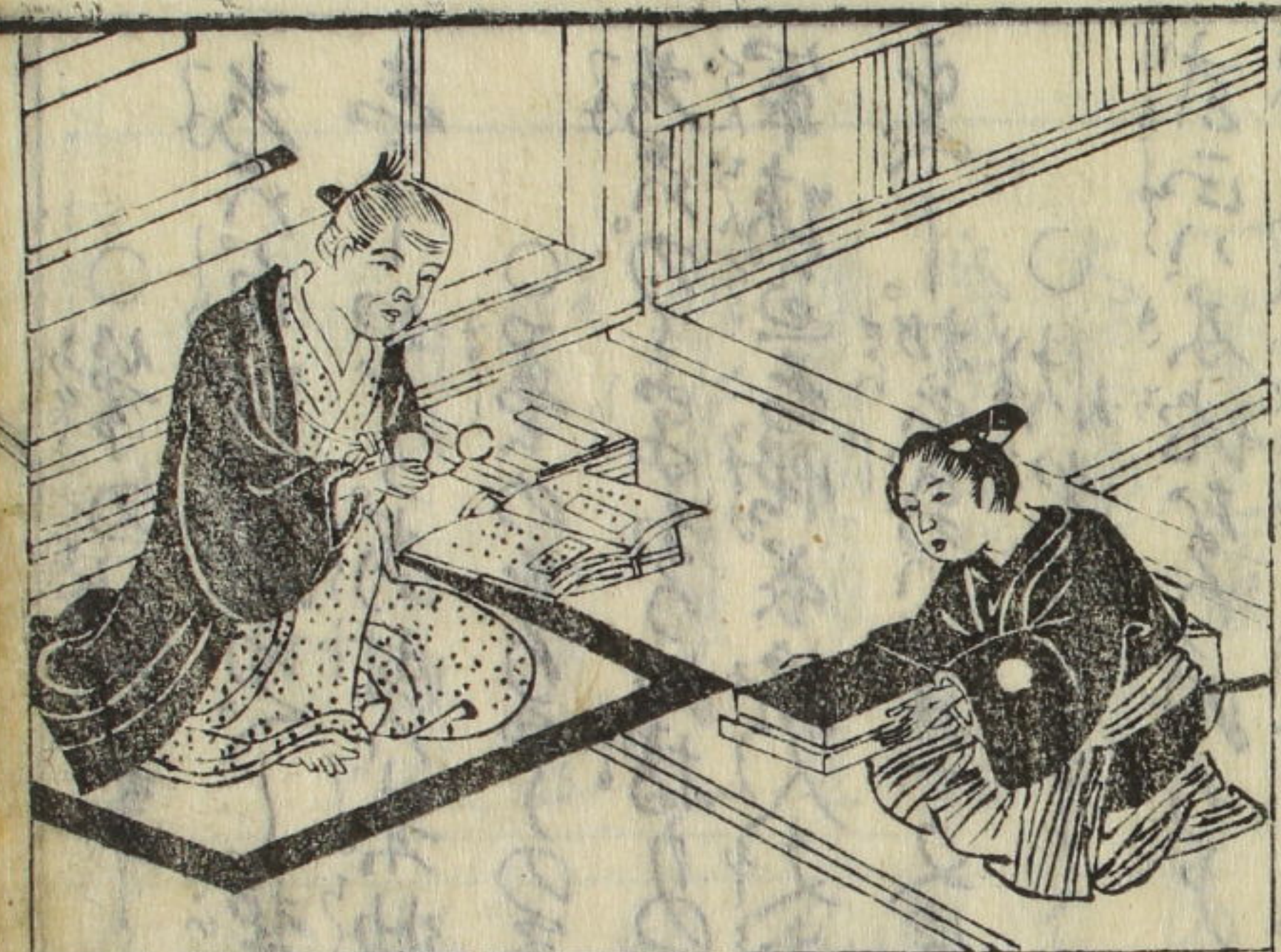






- 名人より解状書事
- 太刀目録書事
- 鑑目録書事
- 治文書事
- 送物目録書事
- 額神本佛前書事
- 野口冷法書事
- 河内新書の書事
- 牛王継書の書事
- 人小名付状の書事
- 色紙短冊書の書事
- 不成新十干十二支の書事
- 名人より解状書事
- 太刀目録書事
- 鑑目録書事
- 治文書事
- 送物目録書事
- 額神本佛前書事
- 野口冷法書事
- 河内新書の書事
- 牛王継書の書事
- 人小名付状の書事
- 色紙短冊書の書事
- 不成新十干十二支の書事
- 扇子・物と書事
- 文法並字の集解

# 小笠原流書法秘傳



○ 硯に墨をまじりて書す事  
 書ハ硯のわに紙をまじりて書す事  
 事あり。麻席等も同前あり  
 折紙のつたふかざりて牛王の  
 みを硯の上になやえに書す硯の  
 下に持とくあるをわびて書  
 人の前して紙ハ硯のたふさ  
 とのなり。是ハ小笠原流の秘  
 とのわし吳なり



○筆の油乃事

好む白油と用ゆべし。藍詞函札の墨油を引ゆるなり。  
あつゝあつゝ。尚時ハ朱油を煮くると先ハ廢次の色あり

○墨のとりやうの事

考へて字ありに措りあり。是れ此の時の措きなり。  
軍味と云々。英流人又おのこれはたののまに墨をこ  
よし。拙文のハ墨一文字に措きあり

○状紙の事

式正ハ本地なり。ゆりや申はなす。他へ墨と紙  
上に宛人下はひ方の名字友とす。状紙の上は封  
付る時ハ奏者の名で書付る時ハ書すなり

ける  
寺字

一筆終上は儀

大納言極意の儀極意

長成河原守の儀

猶言方々御守の儀

愚れ儀忌指謹言

月日 長山信彦

月日 正次

河村信重

長入事

○書れす法三六の能の事

出れお。三六のうのつとつとら。出れ  
のうま。あつゝの白紙の三六の  
て。出れ。さく。つと。月日のあひ  
お。三六。月日と宛人の  
別。三六。三六。あつゝ。あつゝ  
む。ゆえ。三六。あつゝ。あつゝ  
して。三六の能。あつゝ。あつゝ  
札の大法あり。あつゝ。あつゝ  
白紙のあつゝ。法のあつゝ。あつゝ  
う。あつゝ



上巻一の式

猶期詠對志指權書

今川新門

月日

皇面

中巻一の式

よみ所新志指權書

富山新部

月日

皇面

下巻一の式

うけりし書

限川新

月日

皇面

赤山あなま

跡きりし書

然りし書

○書判大正の事

其人の事状あり我判とて  
あいつくまゝなる事もよく  
やうに書きしもの也。名のりの判へか  
りて。えわけぐるは。其終あり  
貴人へは。又皆と判の一文を  
同くらゝるに。ゆるものなり。下  
巻へは。判とあけて。振る事と  
らるる事

○神書の事

上巻一の神の神の書とせぬもの

なり。同書一冊の。又は。書  
用事。又へを。おあを。はらひ。た  
昇下して。筆と。移して。出さる。あり  
書。神の内。六と。は。わ。り。又。あり  
一二字。あり。さ。び。て。あ。べ。り

○書判の事

書判の文を。皆。ま。ぐ。書。は。あ。る  
書。は。書。の。ご。り。と。ま。う。二。つ。り。も。あ  
ら。わ。く。書。と。あ。ま。う。こ。の。り。目。の  
書。あ。り。や。く。書。と。あ。か。し。の。あり  
書。判。の。あ。ら。び。と。る。事。あり











日下町長持信云  
 後田将監  
 月日  
 佐久間定門  
 宇都宮左衛門  
 志津市左衛門  
 大飯左衛門  
 五  
 三  
 二  
 一

右小准と徳比へ

○真の在状徳比の事

正で官位の手申と考て文京  
 礼とらへ徳比へ宛布の各字  
 二字除き書ハ玉極のうやまひ  
 所苗字小切の中を次と宛布に  
 文の位より上と考て徳比へ  
 守の字の通より書ハ徳比に  
 徳比ハ松の字同く徳比小切の中  
 徳比ハ下付り下等と考て  
 上 右京左衛門 下左京左衛門  
 中 徳比守 徳比中  
 新入 徳比

○宛布書の在状

是ハま小出は志の在状も徳比を今と考て  
 ハ中徳比小切の中を次と宛布に  
 正で徳比小切の中を次と宛布に  
 正で徳比小切の中を次と宛布に  
 正で徳比小切の中を次と宛布に

○宛状の事

是ハ書前と指差状の事ハ  
 漢とらへ書前と指差状の事ハ  
 の宛へ書ハ玉極のうやまひ  
 宛状とらへ書前と指差状の事ハ  
 正で徳比小切の中を次と宛布に



ふたつとびしは是を極の懸致ありとんじり

○拍鳥状書中の事

拍鳥状の式

一 守書上仕  
中将極益海軍健茂  
御座中畧の席と刻  
宣部は執成と將儀云

長尾白馬

月日

多瀬右内殿

是は書簡小紙懸道紙拍鳥状  
掛くべきとてその宛書付くも  
是と書の中  
拍鳥状よりなり

式の中同

酒紙の拍鳥状  
右様

式の下同

と申入の掛  
はくはく

○料紙用掛の事

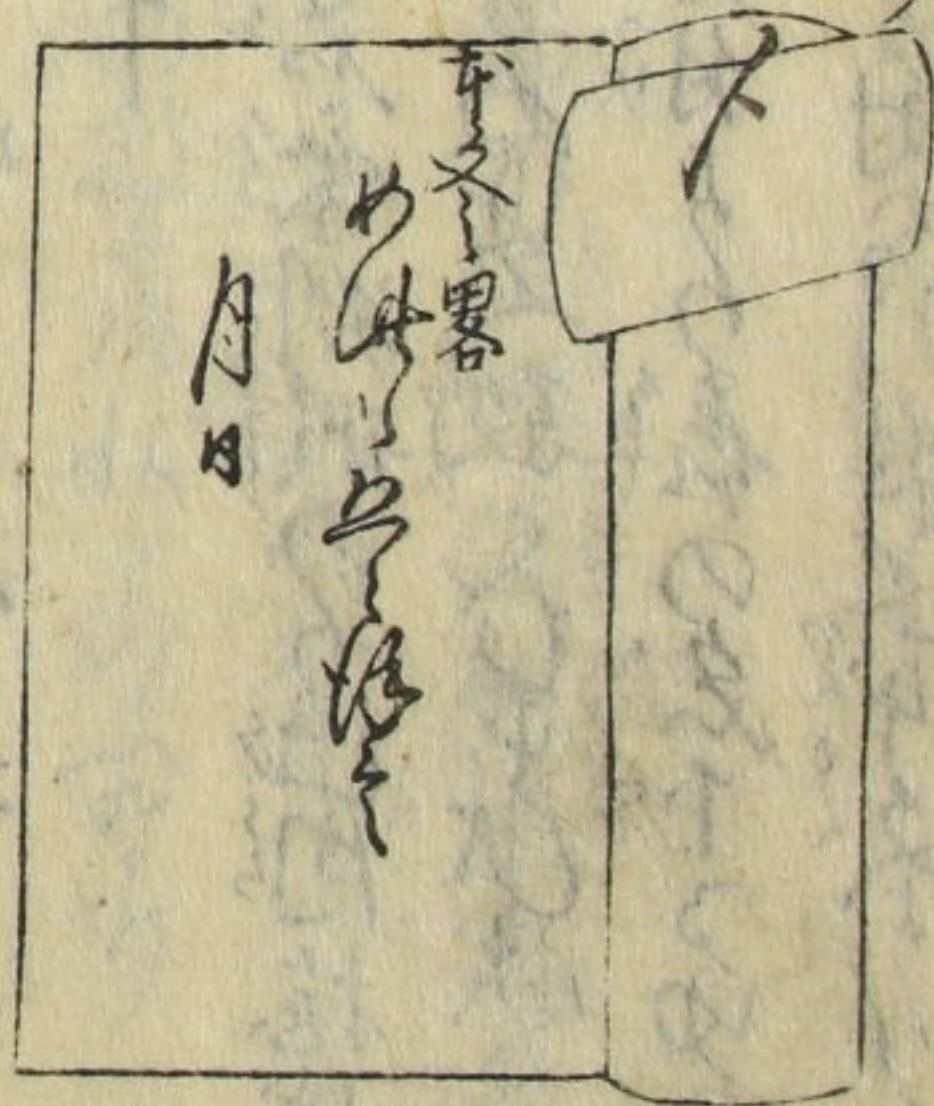
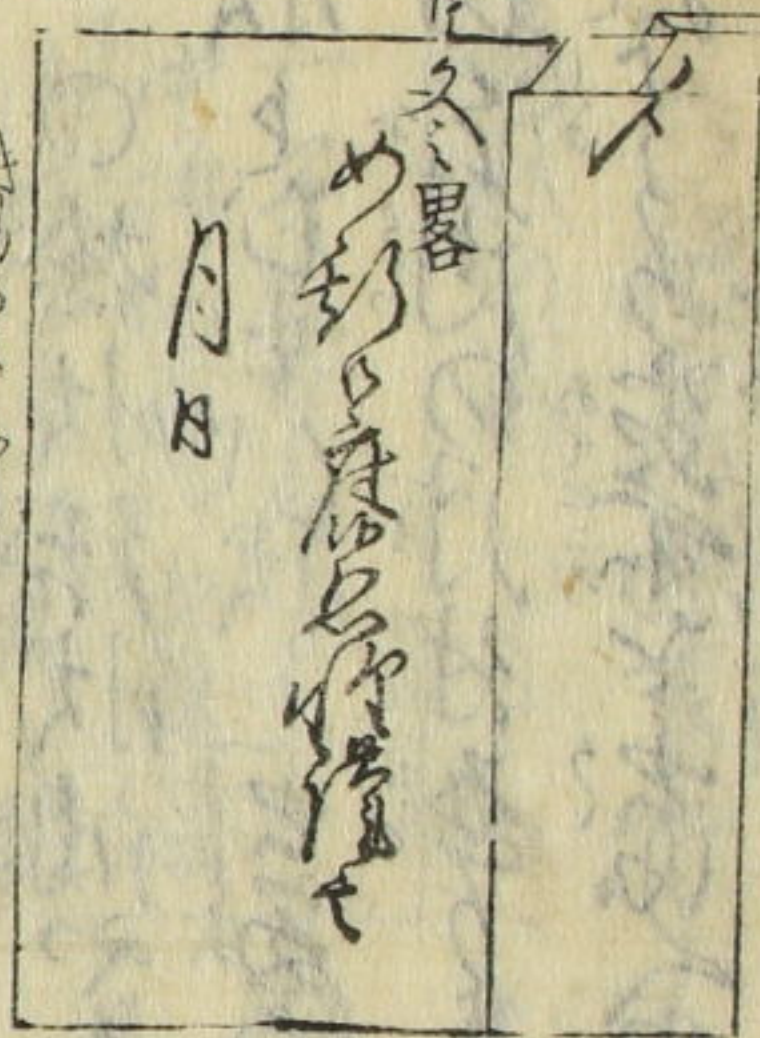
向紙とりので書状とてさしはるる法ありを杉原を以て  
り暗儀なりと知れしとて丸紙を本式より切ハ暗儀  
心掛しそ人なり切紙のあり掛りとも自分より丸紙  
わく懸状を横掛裏白くし掛紙中より致れあり懸紙  
同書ありつひは切紙にて毎用とれども各中元書者  
或は月をさす書函ありの状懸紙は懸紙とんじり扱あり

○懸状結状油やりの事

懸状とじりび状と書ありと名宗判形ありし内懸状ハ  
表の名内の月付懸りより下らぬ西人致しむしび状ハ  
月付より宛書と書内月の月付より表の名下らぬハ  
懸状より結状かば結文小する附ハ月付と本冬ハ



字もさげくむんおりのなり

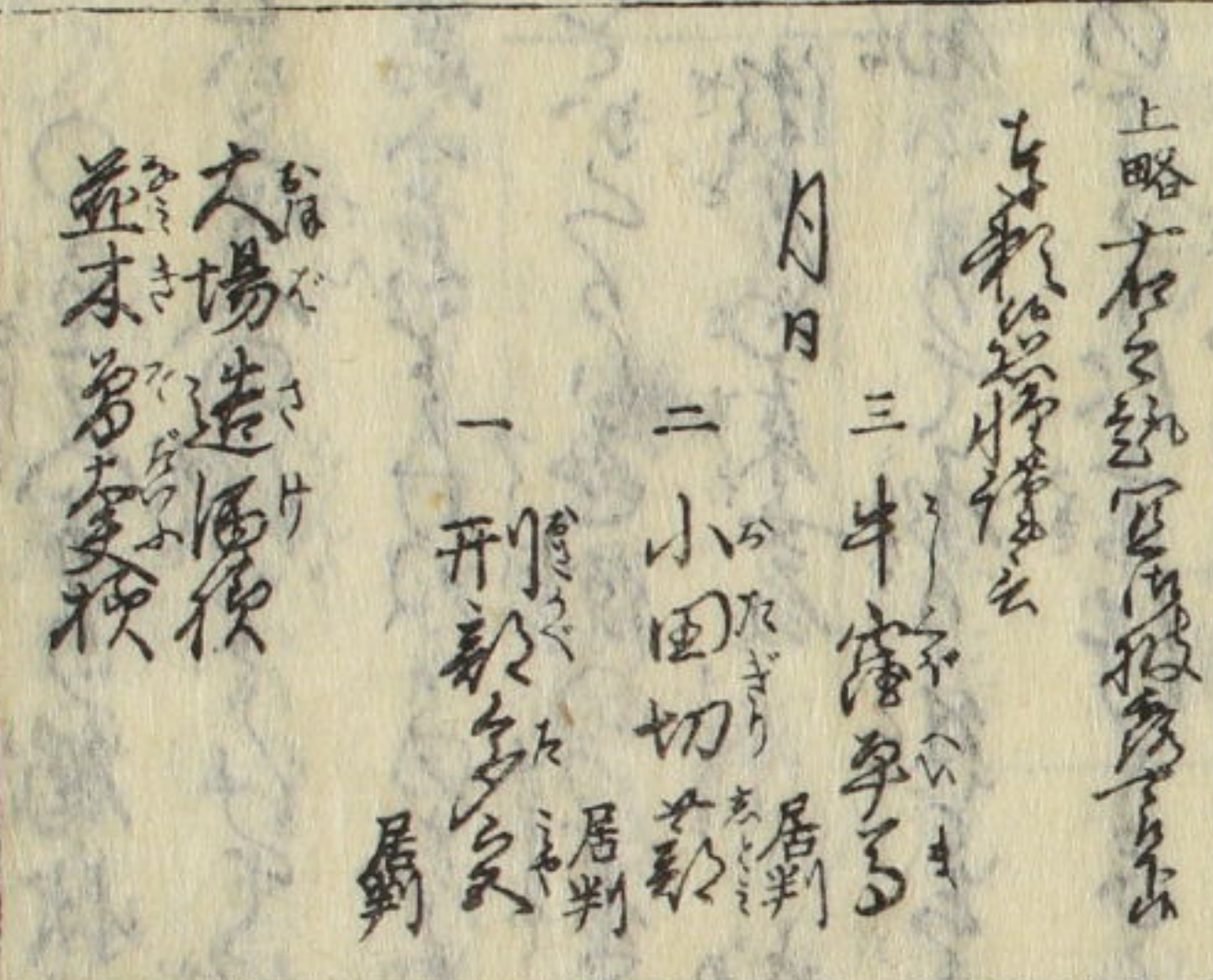


○切紙封じの中の手

切紙ハハ上ととあり月日せうりゆく名を判形を記ゆハ略  
依之是ハ彼首の傍文よりおろりゆ紙と纏て切少く  
付横小まくり法より尚世小月ゆりとき子居の端を細く  
裁てまくりハ略  
依かり



本文の式



○連状の手  
これハ宛布の多きと連状も連名もい之指状信状を  
ハ内小名を裏宛布と人まきハ又人七人とありてハ上と下  
二人とありてめく信ハ名を除去す  
上略右を註官信宛布と云  
なすの指状信云



裏書の式

連名の式







式といふまかりしもの一をよとのよに又うへ字に引添ふ  
若例あるものにては式略式とてしめりあつておつても  
の大小よりしては引添ふもの

○太刀と馬の間へ書込糸の事

武具馬をうまのたぐひ較るをきく衣後などかゝるの物ハ  
太刀の間にまへへ魚鳥柄ハ太刀の間にかゝぬものあり

○堅目録の事

これらも表紙ハ紙一重表紙ハ紙一枚をまへに古法よりまへ  
や一ヶ条おても口ふきをまへにまへとまへとのまへをよまへ  
附ハ一ヶ条のよのふくまへまへをよまへとまへ付ハ口と横柄の  
状ハ一ヶ条とより九ヶ条一寸と下をよまへとまへとのまへより

半字より下へ干鯛とまへへ一ひと干鯛より二字よけて  
まへへ一ひと半字宿名まへのまへよまへへ

○巻書の事

口ふきとまへへ一ひまへへと物の負較と書とまへへまへへ  
堅紙まへへ一ひまへへまへへまへへのまへへまへへまへへ  
まへへまへへまへへまへへのまへへまへへまへへまへへ  
とまへへまへへまへへまへへのまへへまへへまへへまへへ

○紙文の事

口ふきとまへへまへへまへへのまへへまへへまへへまへへ  
まへへまへへまへへまへへのまへへまへへまへへまへへ  
まへへまへへまへへまへへのまへへまへへまへへまへへ  
まへへまへへまへへまへへのまへへまへへまへへまへへ



と古法とを以ての字ハルズと續じ又の字ハアヤと續てを  
 物の品と考細書紀と成る又その有り目録と云ふ  
 口は目録と云ふ一ツ也も物の名目を云ふと云ふ成  
 目録と云ふ目ハ名目の目少く録ハルズと續て名目の  
 りなり覚書と云ふハ口ハ覚書と云て一ツ也と地の名目  
 と云ふものなりゆかゆか一ツ也と云ふ一ツ也と云ふ  
 一葉と云ふハ目録の格なり上ハ一ツ也して屏風  
 一雙并筆繪巻何縁至巻合物何と考細と云  
 と云ふ又の格と云ふなり又云云と云ふ紙と云て也  
 一  
 堅目録の式

式之書覚		進上
一長持	一簞笥	干鯛
一袴箱	一衣棚	以上
一蓆籠	一蓆籠	島田本之座 忠佐
二棹	一対	一折
一棹	一架	
月日	己上	

註文の式	
一具足	一領
一太刀	一腰
一長刀	一振
一槍	二筋
一弓	十張
一清砲	十挺
一策	二本
月日	己上











とぎげのれを掛新口の結とせしこれに神ありとらるは  
 御室前佛前ハ御室殿とせしとと鰐口より行々わのけ  
 空て一乃よ下ト一奉号月日ハ神号より一文字下て流じ



奉掲  
 正八幡宮御室前  
 奉号月日 日向寺源朝皇清定

奉納  
 鰐口之條  
 鬼子母神御室殿  
 奉号月日 丹治直定

○石燈籠去の事  
 神前ハ秋祭する時ハ其申ハ八幡宮も春日大明神も  
 去るも神号より一文字下て右の方寄進石燈籠下

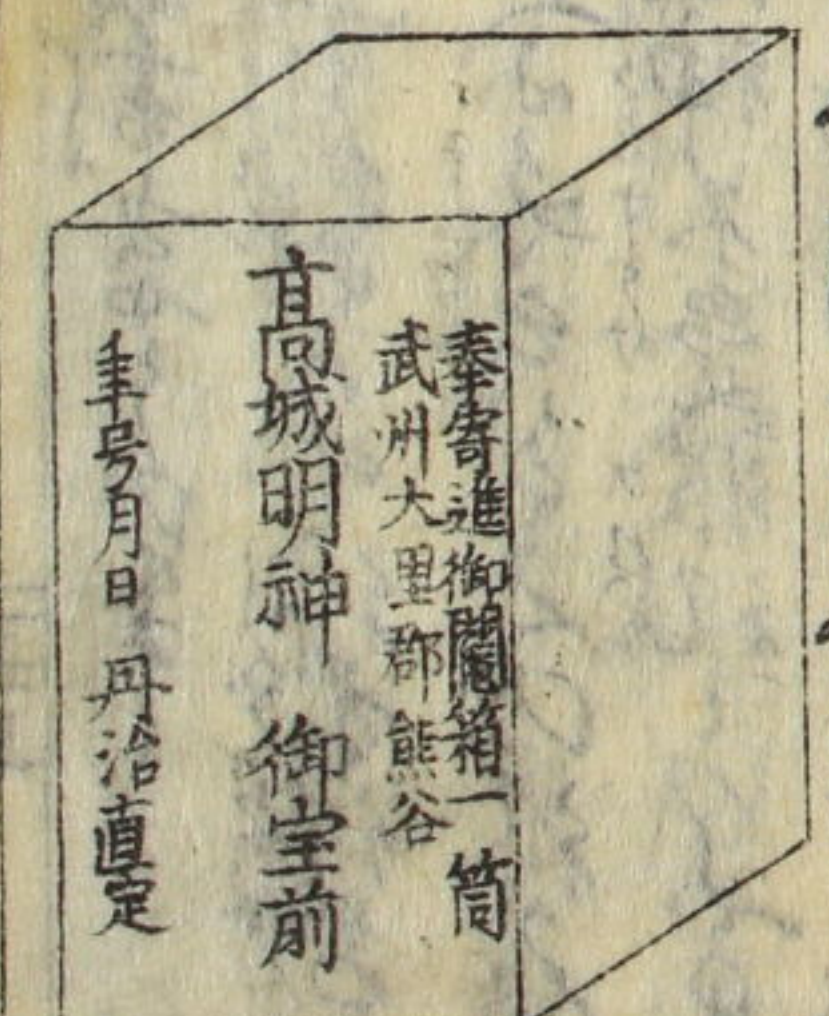
一対なる角ハ兩基とせり片々の対ハ石燈籠とせし奉号  
 石燈籠の事  
 月日その前苗字名とせり  
 又廟前より建てる燈籠とせり  
 中ハ其号とせり一ト一ト其内  
 ありとせり廟前ハ其の建てる  
 時ハ苗字名とせり



寄進石燈籠  
 正八幡宮御室前  
 奉号月日 從五位源朝皇清定

寄進石燈籠  
 竹雲院殿宗山泰金堂 御廟前  
 奉号月日 足立能登行忠

○御園箱の事  
 奉寄進御園箱一筒  
 武州大里郡熊谷  
 高城明神 御室前  
 奉号月日 丹治直定









奉獻 相模守平朝臣

敬白起清文事

一向はま何れ依りて

てしめり

一互中合懐く御前列

候者るあり

一五二中法上り少も痛心

なるあり

右條々於違犯者

書たり部類養身神恩冥罰

各下り養身也とまじあり

血のとりや男は女の養身指

の血とり養身と養身の男は女

女は右の養身指の血とり養身

小たりとのかり養身指はより

指のよりあり

○人小養身と養身の事

これ紙一をを横打あて養身

紙の書やなふある紙は

系かて用ゆる

日本国中六十余州大小神祇  
別而伊豆箱根兩所權現三嶋  
大明神殊氏神御罰蒙者  
也仍起請文如件

奉号月日

荒木丹波守

基道

松下右京亮

有壽判

大庭伊賀守殿

一字養身指の

紙は養身指の

紙は養身指の

紙は養身指の

紙は養身指の

上野大和守

奉号月日

信吉判

飯川代官殿

ひしは十二歳より鳥帽子は  
養身とこれと元服しては



信

年号  
月日

信吉刺

飯川代官より

飯名に依る作の  
新解近中の法  
延中くととて何そ  
之宜称法其為  
派の整昌丁なる

号と係る部之帯なる飯  
名とありて其為帽子親と表  
現するに似一字と認布りし  
高帽子親の名部信吉と六  
上の信の字とつるもか  
の付らぬとて其言法其  
圖するごとく振付人より  
其略をへし

○人小名付状の事

是も紙一葉横折りして湯ふ  
かり熱して是も限らぬ書

海軍大臣の御書

松田佐治

年号  
月日

信

吉野屋と書

くさ

奉名に依る作の  
延中稱法其為  
中の派の整昌丁  
用名とて授けし

年号  
月日  
松田佐治  
信

の法ハ料紙一が紙と法とを  
やとの  
今付る名ハ又云の内よ其の  
かり又人の書生の附名付れ  
りて延中の附状とて其  
是も紙一葉横折りして  
又又云とて其附に紙一葉  
横折りして紙のつくま  
むあり  
いつても紙ハ板紙とて其  
文字の抄字とて其上中下











